

## “受難の深みからの対話” に向かって

3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために (2)

新 原 道 信

### **Toward the “Dialogue with Passion of Obscurity and Abyss”: Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society after 3.11 (2)**

Michinobu NIIHARA

This article evolved from a research project called “Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society After 3.11” which is a part of the European Research Network's activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “regions and communities for sustainable ways of being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, I have sought to clarify the ways in which “dialogue with passion of obscurity and abyss” is lived or embodied in so-called “liminal territories” or “composite corporeality,” in which the varieties of local residents try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research and interviews in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the community residents, while employing such key concepts as “metamorphosis” and “liminality.” The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler and my research experience and submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called “imagination/creativity of limit-situation.”

極限状況を超えて光芒を放つ人間の美しさと、企業の論理とやりに寄生する者との、あざやかな対比をわたくしたちはみることができるのである。……意識の故郷であれ、実在の故郷であれ、今日この国の棄民政策の刻印を受けて潜在スクラップ化している部分を持

たない都市，農漁村があるであろうか．このようなネガを風土の水に漬けながら，心情の出郷を遂げざるを得なかった者たちにとって，故郷とはもはやあの，出奔した切ない未来である．地方を出てゆく者と居ながらにして出郷を遂げざるを得ない者との等距離に身を置きあうことができればわたくしたちは故郷を再び媒介にして，民衆の心情とともに，おぼろげな抽象世界である未来を共有できそうにおもう．その密度の中に彼らの唄があり，私たちの詩もあろうというものだ．そこで私たちの作業を記録主義とよぶことにする……と私は現代の記録を出すについて書いている．（石牟礼道子『苦海浄土』「あとがき」より）<sup>1)</sup>

## 1 はじめに “生存の場としての地域社会の探究／探求”

本稿は，中央大学社会科学研究所の共同研究チーム ヨーロッパ研究ネットワークで行った“境界領域”のフィールドワーク<sup>2)</sup>から「3.11以降の惑星社会」チームへと引き継がれた研究活動に基づいている．「惑星社会」チームは，社会的痛苦の縮減を可能とする“生存の場としての地域社会の探究／探求（Exploring Regions and Communities for Sustainable Ways of Being）」を長期目標としている．そして，“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する（responding for/to the multiple problems in the planetary society）」こと，とりわけ，「3.11以降」の“生存の場としての地域社会”形成にむけて，“惑星社会のフィールドワーク（Planetary Fieldwork, Thinking planetary on “the liminal territories”）をすすめていくことを眼目としている．

「水俣にはいま私たちが直面している地球全体の問題の核がある」とした石牟礼道子は，「この国の棄民政策の刻印を受けて潜在スクラップ化している」都市と地域，そこに／そこから離れて暮らす「出郷者」の“受難”にふれようとしつづけた．「（故郷という）出奔した切ない未来」にむけての声なき声を描き遺した石牟礼の，水俣からの“惑星社会の問題”への問いかけは，「3.11以降」を生きる私たちすべてにとっての“わがこと（my cause）」とならざるを得ない．にもかかわらず，「想定外の出来事」に対して，“ひとごと（not my cause）」であってほしいという力が，どのように働らくのかについて考察することが本稿の課題である．

いま日本列島では，「自分の背骨が折られていく」という思いで，そこから／そこで「出郷」したひとたちが，うめき声をあげ／声を押し殺しつつ暮らしている．地域社会は“根こそぎ（uprooting/eradication, sradicamento/eliminazione）」に破壊され，被災地では「保障」をめぐる恣意的な境界線が引かれ／分断され／除外される．「ここに居る」（最首悟<sup>3)</sup>）しかないひとたちが，「心情の出郷」と「居ながらにして出郷を遂げざるを得ない」状況となっている．

上野英信が追いかけて掘り続けようとした「棄民／棄国<sup>4)</sup>」の問題，さらには，「廃棄物」に囲まれ，「安全」は「守られ」ず，地方の廃棄，不採算部門の廃棄，価値の廃棄，自然・地域・価値・願望，何よりも“人間そのものの廃棄（dump[ing]）」<sup>5)</sup>の問題が顕在化している．にもかかわらず，その一方で，「危機的な瞬間（critical moment）」に開いた可能性が「空間」や「窓」

を閉じようとする“肯定性のホメオスタシス(Homeostasis of positive)”,「おわったこと」にしようとする“忘却( amnesia )”“忘我・自失( raptus )”の力, 受難・死・喪失・社会的痛苦を「なかったこと」にする“没思考の浄化主義( purificanismo spensierato )”, 自らに埋め込まれ, 植え込まれ, 刻み込まれた“無関心( exterior-esse / fuori-esse/ indifferenza / fremd, not my cause/lack of caring )”“関心の欠落( disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening )”“没参加( dissociate/disengage oneself )”の力に縛られてもいる。

「3.11以降」,「政府主導の開発・成長」という中央集権システムに疑義が突きつけられる一方で,「復興計画」には土木系の直轄コンサルタントがかかわり, 震災で建築業界は「延命」している。大きな家に住んでいたひとたちが,「2年が耐用限度」の仮設住宅に暮らし, 土地とひととのつながりから切り離され, 単身者や働き手のいない世帯が増加している。持ち家の住宅ローンがのこる中高年, 債務免除, 生活債権支援金も難しい。高齢者にとって, 持家債権にも公営住宅も, 将来そこに誰が住むのかという問題が残っていく。なんとか「生活」はできるが, 断ち切られた人生のつながりをどう再建するのか。ひとの復興と「地域の復興」が切れていて,「復興」しても「自分のまち」ではなくなり, 金をかければかけるほど「自分のまち」でなくなっていく<sup>6)</sup>。この「開発」の構造の“連続性”と個々人の内的プロセスとしての“亀裂/断裂”は, ダム建設, 炭鉱の閉山, 水俣, その他の拠点開発などでもくりかえされた関係性であった。

これに加えて, 私たちはいま,「3.11以降」の不安を生きている。「3.11後」をどうするか以前に, すでにつくりだされ循環し滞留してしまっている「廃棄物」がある。核エネルギーや各種の化合物などの「発明品」は,「廃棄物」となった後も, 大気圏に, 大地に, 水系に,「異物」として半永久的に残り続ける。生態系の循環のもとで, 風に運ばれ, 雨や雪に付着して, 私たちのもと, 大地のもとにやって来る。天然の鮎やヤマメ, 日本の農山村を豊かな恵みで満たした川や土は, 放射能の受け皿へとその姿を変え,「異物」は私たちの身体にも蓄積されていき, 予測困難な「劇的な収支決算」を, これから生まれ来る世代にもたらしつづける。土地がこわれ, 過去の記憶や資産, 仕事や暮らしから切り離され,「未来」は不透明であるにもかかわらず,「開発」「成長」という枠組みの範囲内で,「震災復興再開事業」は,「3.11以前」からの土建業という「過去の成功への『過剰適応』」「パターン化された『模範解答』」に縛られている<sup>7)</sup>。

「限界状況( Grenzsituation )」は, ナチスの時代を生きたドイツの哲学者カール・ヤスパースの言葉である。死, 病, 痛苦, 紛争, 罪責, 偶然など, 膨大な時間とエネルギーを費やして人類がつくりあげてきた「日常」を粉碎してしまうような「限界状況」から, 私たちは逃れることは出来ない。しかしながらもし, 石牟礼が“出会って”いたような,「極限状況を超えて光芒を放つ人間の美しさ」, 言い換えるならば, “限界状況の想像/創造力( imagination/

creativity of limit-situation)<sup>8)</sup> が現れる瞬間や場が在るのだとしたら、それはいかなる条件のもとで起こるのか。「その密度の中に『彼らの唄』があり、私たち詩<sup>ボエム</sup>もあ」のような、願望としての「切ない未来」であるところの「自分のまち」、すなわち、“生存の場としての地域社会”への可能性をどこに見出すのか。

このように、“惑星社会の諸問題”に直面する「3.11以降」の“生存の場としての地域社会”を考えると、ごくふつうの「日常生活」を生きる私たちにおける“無関心/関心の欠落/没参加”のもとでの、“受難の深みからの対話 (dialogue with passion of obscurity and abyss)”の可能性がとりわけ重要となってくる。こうした問題意識から、本稿では、“対話の困難”の側から、考察を試みたい<sup>9)</sup>。以下のような問いかけを自らに課しつつ：

いまもなお、これからもずっと、放射能を含んだ水が流されつづけているこの時代に、なぜ私たちは、自分の身体の問題でもある“惑星社会の諸問題”を意識できないのか？  
受難、死、喪失、社会的痛苦を「おわったこと、なかったこと」にする力に取り囲まれつつも、いかにして、“無関心”“関心の欠落”“没参加”から“ぶれてはみ出すひと (playing self)”となるのか？

## 2 “根こそぎ”と“亀裂/断裂”

本論に入る前に、「惑星社会」「3.11以降」「生存の場」という一連の言葉については、説明を要する。イタリアの社会学者アルベルト・メルッチが提唱する“惑星社会 (planetary society)”論は、システム化・ネットワーク化・グローバル化し、「差異を産出する複合社会」の「可能性」の側面に注目する通常のグローバル社会論に対して、自然や資源の有限性、極度にシステム化した社会の「限界」に着目する現代社会論である<sup>10)</sup>。

After 3.11に対して、「3.11後」ではなく「3.11以降」という言葉を選択した理由は、突然、「想定外」の事件が起きたが、それは「もうおわった」ことであり、また以前のようなやり方がかつての在り方へと「復興していく」のだ という思考態度 (mind-set) とはことなる認識

「3.11」の「以前」と「以後」の“連続性 (国民社会における生活の構造、政治経済・制度の連続性)”の一方で、個々人の内的プロセスとしては“亀裂/断裂 (split/rupture, spaccatura/rottura)”が生じていることへの着目 が背景に在る。

すなわち、日本社会とそこに生きる私たちの「状況・条件」は、「震災、津波、原発事故」で変わってしまったのではない。“多重/多層/多面の問題”は、「3.11以前」にも“未発の状態 (stato nascente, nascent state)<sup>11)</sup>”で「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」し、「3.11」はその問題が顕在化する契機となったに過ぎない。「3.11」が起これば、これから新たにゼロから“始める”のではなく、すでにつくりだされてしまったものや、つくられだされてしまった

ことを認識するしかない。これからどうするか以前に、すでにつくりだされ循環し滞留してしまっているリスクの存在を「(うっすらとは予感していたが、やはり) そうであったのか」と認めるしかないのである。

そしていま、「見知らぬ明日 (unfathomed future, domani sconosciuto)」を生きる私たちは、「3.11以前」から連続して存在してきた原発・震災問題も含めた“多重/多層/多面の問題(the multiple problems)」に対して、「生活」や「生き方 (ways of living)」だけでなく、「いのち」さらには“生存の在り方 (ways of being)”にまで及ぶ価値観の見直しへの責任/応答力 (responsibility)，“生存の場としての地域社会 (Regions and Communities for Sustainable Ways of Being)”の探究/探求を必要としている<sup>12)</sup>。

メルッチは、想像したり把握したりすることが困難な“惑星社会”への洞察が(倫理にとどまらず)論理的必然となった社会を私たちは生きており、“惑星社会の諸問題を引き受け/応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)”ことがこれからの学問の使命だと考えていた。グローバリゼーションによって「外部」(あるいは「植民」の対象となるはずの)「フロンティア」「荒野」は消失し、また、線形に予測される未来も失われ、いまや私たちは、思っていたほど広くも無限でもない「惑星地球」に暮らしている。ひとたびこの土地の許容範囲を超えた資源の採掘や汚染が起これば、たやすく社会そのものが「自家中毒」を起こし、“生存”の基盤が脅かされる。こうして“惑星社会”は、すべてがローカルな運命共同体、逃げていく場所のない領域(テリトリー)として存立している。

Think globally, act locallyは、「3.11以降」の惑星社会においては、どのように言い換えられるのだろうか。メルッチならば、Think planetary, act contrapuntallyあるいはpoly/disphonically(いまこの自分の持ち場で、惑星そのものの命運を考え、対位的に、不況和音となることを恐れず、常に自分のなかに/他者との間に多声を確保しつつ行動しなさい)というのではないか。『プレイング・セルフ』というタイトルには、“惑星社会”という現在を生きる人間が、構造とシステムに組み込まれた自己から“ぶれてはみ出し (playing & challenging)」、自らの“かたちを変えつつ動いていく (changing form)”ことへのエールがこめられていた。

今日の「複雑性のジレンマ」がもたらすところの個々人の内なる“痛み/傷み/悼み”は「涙み」となって沈殿し、ある日突然発火し噴出する。メルッチは、“現在の危機/危機の現在”を生きる個々人が、その“生存”の危機に際して、揺れ動き、震えおののき、“見知らぬ明日”の渦中で、“ぶれてはみ出すひと (playing self)”として生きることを、身体で覚えてゆく可能性と条件を考えつづけた。

日常生活と社会システムの間位置する社会運動の背後にあって、社会的プロセスの根本的な変化が始まる場であるところの「内なる惑星 (the inner planet)」, すなわち諸個人の“心身/身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)” 人間そのものの (antropo-)「身体と精

神, 感覚, 知覚, 意識, 胸中, 心, 魂 (corpo e mente, sensazione, senso, percezione, coscienza, consapevolezza, cuore, animo, anima)」などとしてイメージされる領域 (elemento) の奥深く, 身体化された社会現象を掬い取るうとすることが, 今日の社会学の重要な課題である。

つまりは, Perceiving the roots and routes of relationship, Perceiving the dynamism of relationship), 土地やひとの「パルスを感じとる」こと (Perceiving, listening and sensing the pulse of relationship), リズムを感じとること (Perceiving, listening and sensing the rhythms of relationship) である。そのためには, いずれは意味をもつ「旋律」となるかもしれないデータ/エピソードを“対位法”的に収集・蓄積し, keeping perception/keeping memoriesを行い, 「あくまで可能な筆写 (trascrizione) のひとつ」を遺していくことが, “リフレクシヴな調査研究 (Reflective/reflexive research, Ricerca riflessiva/riflessa (triR))<sup>13)</sup> の「エピステモロジー/メソドロロジー/メソツズ」となるとメルッチは考えた。以下では, より具体的な考察に入っていく。

### 3 「3.11以降の惑星社会」を考えるなかで「起こったこと」

“ぐいっと呑み込む, 書き/描き遺す, 刻み込む (keeping perception/keeping memories)” という「エピステモロジー/メソドロロジー/メソツズ」の実行にあたって, 重要となるのは, “傷つきやすさ/攻撃されやすさ, 罪責/悪/弱さをつつみかくさず, 道理のある話をする (chiacchierare con tutte le vulnerabilità e le ragioni)” ことである<sup>14)</sup>。ここでの記述においては, できる限りその瞬間において生じたひっかけりやとまどい 違和感を残す形をとっている。「客観性」をこころがけるといっても, その場にあった個人のもっている偏り, 偏狭性, 相対的 境界性を残した記述を重視した。偏りはあるもののその記述のなかには確実に書き手 (観察者 であり参加者) の“かまえ (disposizione)” が刻印されるからである。

したがって以下に記されているのは, 「起こったこと」についての客観的な記述である というよりも, あるひとつの場所で生じたことについての複数の証言の「あくまで可能な筆写のひとつ」に他ならない。それゆえ記録のなかには, 読み手にとって不当な, 不適切な, 誤解を含んだ記述が多々みられるはずである。むしろこの記録は, 異議申し立てを受けることを予想して書かれている。記録を読んでくださる方に, その内容についての様々な角度からの 吟味をしていただけることを期待している。それでは, この地点から, 「想定外の出来事」への 応答となったエピソードの検討に入りたい。

「惑星社会」チームのメンバーは, 中央大学文学部の「プロジェクト科目」において, “惑星 社会の諸問題を引き受け/応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)” ための “対話的なエラボレーション (co-elabolation, coelaborazione, elaborazione dialogante)” を試みた。



2012年度は、「歩く学問／フィールドワークから学ぶ」をテーマとして、講師には、西浩孝（大月書店）、木村哲也（歴史・民俗学者）、百崎満晴（NHK仙台）、大西暢夫（写真家）、鎌田遵（亜細亜大学）、藤岡亜美（スローウォーターカフェ）、亀山亮（写真家）、中村寛（多摩美術大学）などの講師をお迎えし、学生諸氏には下記の呼びかけをした。

いま私たちは、「見知らぬ明日」に直面しています。事故や災害、病気などに直面したとき、私たちは、たった一人で「異郷／異教／異境」の地に降り立つような感覚を持たざるを得ません。「3月11日」の大震災では、中央政府や巨大企業が混迷する一方で、地域で暮らすひとたちの「応答力」が顕著に現れました。まさにいま、自分の足で歩き、ひとが見落としたものをよく見て、聴こえない声を聴くことの力、「生身」のひとにきちんと出会い、ともにじっくりと考える力が求められています。講義の場には、「専門家として対処」という枠から、あえて“ぶれてはみ出し”，人間としての根本的な問題を大切に、”臨場・臨床の智”を蓄えてこられた方をお招きして、対話を試みます。本の書き手、TV番組の制作者、写真家、新しい生き方を実践するひとなど、それぞれのフィールドで、そこにある事柄をていねいに掬い取り、表現されてこられた方たちの“智慧”にふれることで、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して地域社会の形成に寄与するひと、様々な「専門領域」をつなぐひと（“社会のオペレーター”）へと成り行くための道を開ければと思います。

つづいて、2013年度には、「生存の場としての地域社会の探究／探求」、とりわけ“受難者／受難民（*homines patientes*）の生をテーマとして、友澤悠季（立教大学）、中村寛（多摩美術大学）、鈴木鉄忠（中央大学）、木村哲也（歴史・民俗学者）、鎌田遵（亜細亜大学）、金迅野（在日大韓基督教会牧師）、鈴木健（川崎市ふれあい館）などが講師となり、下記の呼びかけを行った。

今年度のテーマは“生存の場としての地域社会の探究／探求”です。「3.11以降」、私たちは「見知らぬ明日」に直面しました。持続する危機のなかで、いかなるかたちで“生存”を確保するかというところまで問題を遡る必要に迫られています。それでもなお、人間に“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした”ものであるはずの“智”が、輝きを放つ瞬間があるとしたらそれは、いかなる条件・旅程をともなって“創起”するのか。本講義の目的は、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”「3.11以降」の持続可能な地域社会／コミュニティ形成の担い手となる“社会のオペレーター”の育成です。到達目標は、講師の方たちとともに“生存の場としての地域社会の探究／探求”を自ら試み

ることにあります。この地球上のどこか、どちらかといえば“遠き果て/端”のことだと  
思い込んでいる微細な徴候、とりわけ“受難者/受難民”の生のなかに潜む“惑星社会の諸  
問題”を掬い取っていきたいと思います。参加者のみなさんひとりひとりが、なけなしの  
智恵を持ち寄る場として、プログラムを構成したいと考えています。

この呼びかけに応じて集まってくれた学生諸氏は、「3.11以降の惑星社会」において、様々  
な場で生起しつつける“受難者/受難民”の声を聴くという趣旨を理解し、強い問題関心、緊  
張感と真剣さをもってプログラムに参加してくれた。「惑星社会」チームのメンバーのゼミ生  
や講義の「常連」も多く、毎回の参加者もほぼ固定され、顔の見える関係性で濃密な知的やり  
とりが可能となる空間であった、2年間にわたるプロジェクト科目での“対話的なエラボレイ  
ション”の成果については、稿をあらためて論じる予定である。ここでは、2013年度に入って  
から起こった、ひとつの「想定外の出来事」への応答をめぐる考察のみを行いたい。

2013年度のプログラムが中盤にさしかかった5月28日、これまでの講義をふりかえり理解を  
共有するため、グループに分かれて話しを始めた。そのなかで、ひとりの学生（以下、J君）  
が「発作」で倒れた。突然、椅子から崩れ落ち、倒れた際に頭を強く打って床に横たわったま  
ま、白目をむき、口から泡を出していたが、しばらく放置され、周囲の人が気付くのは少し  
後のこととなった。保健センターや事務室の助けを借りて「対応」したが、J君と話をしてい  
たものたち、近くでグループワークをしていたものたち、参加していた複数の講師たち、様々  
な「距離感」はあったが、ほとんどのものがしばらく異変にも気付かず、そして気付いた後も  
何も出来ず、ただ「茫然」となっていた。現にそこで起こった「事件」に対して、大半のもの  
は、結果としては「傍観」し、ただ「推移を見守る」こととなった。

同じグループにいたものからは、「班作業で冗談を言うなかでJ君が倒れたが、最初は  
遊びでやっているのではと思ったのでしばらくそのまま放置しておいた」という証言が  
あった。比較的近くにいたものは、最初にJ君が苦しそうな声をあげたとき、おそらくそ  
の声を耳にしていた。しかし、その後に「同じ班の人たちから笑う声が聞こえたため、冗  
談だったのかと思って、そちらを振り向いて何が起きているのか確認することをしなかつ  
た」とのことだった。

「事態に気付いてからは、どうしていいかわからず、『誰かなんとかして』と思い、『見  
守る』だけだった」。

何人かは彼のかたわらに集まり、出来ることを探した。散らばった文具を整理したり、  
ティッシュを出してきたりした。身体を横にむけて気道を確保した後、保健センターの医  
師・看護師に対応してもらい救急車を待った。

救急車を待つ間、保健センター職員の方より「学生を解散させ、この件については口外



しないように言ってください」という指示があった。しかし、そうせずに「すべて」を見届けもらい、その場でどうしても必要だと思った「生老病死」の意味について話した。

この日参加したすべてのメンバーで「搬出」を見送った後、来週以降は、「この場で起こったこと」、そのなかで自分がどう考え、どう動いたかをふりかえることを確認して散会した。

翌週、「惑星社会」チームのメンバーは、学生諸氏によって自主的につくられたグループに入れてもらい、学生諸氏そして自分自身の声のみならず表情やまなざしに耳をすませた（これは期せずして、「観察における調査者側のコミュニケーション行為を把握することを欲した。すなわち、その調査は、調査研究グループ自身の自らへのリフレクションを含みこみ、そこでは、そのリフレクションの結果も調査の成果に組み込まれるというものである」というメルツチの“リフレクシヴな調査研究”の実践となった）。以下では、「5月28日以降、何が起こったか」についての理解を試みる。

#### 4 「起こったこと」をどう理解し、語るか

倒れた次の日、J君から、「お忙しい中、気にかけてくださり、本当に有り難く思います。」という連絡が届き、新原と彼との間で何度かのやりとりをした。「自分からは中々気が進みませんが、これを機にみんなに知ってもらおうと思いました」となり、次回の講義の場では本人からの事情説明をすることにして、6月4日、J君が、自らの「病歴」とその意味を話した。筆者は、「5/28に起こったこと」の意味を考えるため、以下のような文章を配布し、口頭でも話した。

あの5月28日に、「何も起こらなかつた」かのごとくに、この集まりをつづけることは出来ないと考え、つたない言葉を発しようと思いました。ご静聴いただけましたら幸いです。今年度のプロジェクト科目は、「生存の在り方（Sustainable Ways of Being）」をテーマとしました。何か「について」論じる評論家でも傍観者でもなく、「生存の場としての地域社会」「を」ともに考えるプレーヤーとしてこの場に居て行動することをめざしてやって来ました。

その場所で、おたがいの声や音が届く場所で、一人の人間が突然倒れました。そのときアナタは、ワタシは、一人の人間としてどうしていたのか。「生存」を考えることへの「トータルな人間としての応答」が求められていたまさにその場所で、なぜ私たちは、いわば「もう一人の自分」が直面した危機的瞬間を「傍観」しつづけてしまったのか。突然に椅子から崩れ落ちた「隣人」を見て、かたわらにいたひとは、なぜすぐに声をあげられなかったのか、遅ればせながら状況を把握した教員やアシスタントが動きだしたとき、そして、医

師や看護師，事務職員，さらには救急隊がかけつけたとき，同じ教室にいた自分はどのようにしていたのか．この事態をどのように理解し行動していたのか／していなかったのか？

これまでの授業のなかで，参加しているみなさんが「善き人」であることはわかっています．いろいろな想いを持ってくれていたことでしょう．しかし，個々人の内面でどんな気持ちが出来ていたにせよ，もしあの場所を「遠景」から撮影・記録していたとしたら，そこにはただ，「生身の人間に無関心な野次馬の群れがいた」と言われたかもしれません．だとすると，日々の報道で私たちがヴァーチャルに接する「無関心な群衆」は，アナタやワタシ自身かもしれないということになるかもしれません．「今度同じようなことが起こったら，いろいろ考え行動したいと思います」と言ったとしても，その「今度」においてもまた，同じく「停止」してしまう可能性が高いかもしれません．目の前で，殺傷事件が起きて，飛び降り自殺が起こっても，心肺停止が起こっても，子どもが溺れていても，だまってやり過ごしてしまうかもしれません．トータルな人間としての自分は，具体的な特定の危機の瞬間において，どのような「思行（思い，志し，言葉にして，考えると同時に身体を動かしてみる）」を遣すのか　各自がふりかえてみる必要があると思いました．

この教室もまた，人間がつくる社会の「縮図」です．ことなる成員によって構成される「小社会」では，誰かが倒れたとき，逆にあまりに多くのひとがあわてて動き，事態を悪くしてしまうという場合（たとえば，すぐには動かしてはいけない頭部を揺り動かしたり，あおむけにして舌を巻き込ませてしまったりと，善意がかえって不適切な行為をまきおこす可能性）もあるでしょう．しかし，私たちが構成員とする「小社会」においては，大多数がその場で「判断／行動を停止」するという事態が起こりました．このことの意味をよく考えることから出発するしかないと思います．この「停止」のなかには，「自分はどのようにいいかわからないので，ひとまず事態を見守ろう」，さらにその背後には，「専門家や指導者の指示に従おう」という判断があったと思います．これは，テクノクラートやマネージャーが「管理」する「社会」に通底する判断です（機会があれば，この問題は詳しく述べますが，「大衆社会／専門家支配」の問題です）．

「専門家や指導者による適切な解答」への依存でも「とにかくやってみる」という「決意主義」でもなく，リスクを引き受けることを甘受しつつ，“身実（みずから身体をはって証立てる真実）”を追求する人間が現れない限り，「20世紀の愚行／考」は，21世紀においても，より深刻なたちでくりかえされるという「予見」から，第二次大戦後の社会は出発したと私は考えています．

こうしていま私たちは，いかなる「専門家」や「指導者」であれ，適切な「解答」など提示できない「見知らぬ明日（unfathomed future）」を生きており，その状況・条件下で一

人のプレーヤーとして自ら行動を起こさぬ限り、自分や家族や友人を守れない、というのが本講義の出発点でした。Think planetary, “見知らぬ明日” に立ち向かうプレーヤーとして独り立ちするためのトレーニングをともにする。これが今年度のプロジェクト科目の最大の眼目でした。今回の出来事で、私たちは、自分たちの現況を思い知らされました。

真剣に学んでいるまさにその場所で生起していた微細な動きをふりかえること。ここから、再開せざるを得ないと思っています。

## 5 「について/を」考える

“受難者/受難民”の生にふれるという流れで、6月4日は、木村哲也さんより「ハンセン病者の詩 詩人・大江満雄との交流を中心に」、さらに6月11日は、鎌田遵さんより「アメリカ『先住民』の表象」という話をしてもらった。そして、6月18日に「5月28日の出来事」をふりかえるためのグループワークの機会をつくって、下記のようなかたちで補足する文章を配布し、口頭で話した。

誰かの身を削っての言葉、あるいは声とならなくても、渾身の力で発せられた“受難”のシグナルを「なかったこと」としてしまわないように、「映画」や「写真」や「絵画」や「ドキュメンタリー番組」を見たり、「詩」や「音楽」を聴いたりして、「心から感動」し涙を流した後に、さっと気持ちを切り替え、あたかもなにも「なかった」かのごとく「日常」へともどらぬように。誰かの「対岸の火事」を「新たな発見」として「賞味」し、すぐに忘れてしまわないように。「(自らの)良識(を自認するひとたち)」の「向こう岸」に在るところの、「罪責の感覚(das böse Gewissen)」から、考えたいことがあります。

5月28日から現在に至るまでの間、私たちは、二度の“根本的瞬間(Grundmoment)”を体験しています。一度目は、5月28日です。救急車を待つ間に、保健センターの方たちからは、「個人情報とかかわることなので、すぐに学生さんを解散させてください。そして学生のみなさんには『なにごともしなかった』と伝えてください」と言われました。しかし私は別の判断をして、その場にいたみなさんに「すべて」を見届けもらいました。みなさんが帰られた後、その場に残ってくれた講師のみなさんと、この日の意味をふりかえり、陰鬱な時間の流れのなかで、きわめて厳しいやりとりをしました。私たちひとりひとりの身に「起こったこと」を、深く真剣にふりかえる必要を強く感じ、この文章を書きました。

6月4日、「鳴かずば撃たれる」ことがないはずのJ君が、あえてこの場で、我が身を削り、自らの「病歴」を話してくれました。そして私は、みなさんに、「これまで学んできたこととのかかわりで、5月28日の教室にいた自分はどうしていたのか。この事態をどのように理解し行動していたのか/していなかったのか」という「トータルな人間として

の応答」をお願いした文章をこの場で紹介し、木村さんからは渾身のお話をさせていただきました。この問いかけは、「プレーヤー」としてこの社会や文化をつくることにかかわっているみなさんの「自己診断」「我が身を持って証立てる ( sich betätigen )」ことへの要求を意味していました。

二度目の“根本的瞬間”は6月11日の講義終了後でした。この日は、鎌田さんが渾身の話をしてくださいました。講義の終了後に、通常よりはかなり少ないリアクションペーパーを受け取りました。5月28日にその場においてコメントを書いたひと、その場にいなかったがコメントを書いたひと、数行のみ書いたひと、木村さんへのコメントのみ書いたひとがいました。5月28日には、確実にもっと多くのひとがいたはずですが、この“没参加 ( dissociate / disengage oneself )”は何を意味するのか？

「社会的痛苦を引き受け掬い取る」ことが渾身の力で語られたこの場所で、「見過ごされ」「やり過ぎされ」たことの意味を、「プレーヤー」としてこの場に“居合わせる ( Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place )”機会を持ったみなさんとともに考えたいと思います。

この場所もまた、ひとつの「社会」であると考えてみてください。いま私たちが生きる「惑星社会」には「外部」など存在せず、すべての小さな場所がトータルな社会の「網の目」のメタファーとなっていると私は考えます。この前提のもと、5月28日以降のプロジェクト科目という「社会の質」を考えてみましょう。5月28日にその場所にいた多くのひとたちは、「なんらかの事情」で、6月11日には、応答をすることはありませんでした。また、いまひとつの課題には「答え」つつ、もっとも根本的な問いかけへの応答のみ（選択的に）「省略 ( eliminate )」したひともしました。

5月28日、眼前で突然倒れたひとりの人間と場を共有したひとたちは、その場に「居る」ことも「在る」ことも「なかった」のか？ その場にいた人間の情動は「なかった」のか？

その場に起こったことを記録することへの、このような「反応」はどういう意味を持つのか？ もちろん、渾身の力で深い考察をしてくれたひとはいました。しかしながら、この場をひとつの社会として見た場合、個々人に「様々な事情」があったとしても、“根本的瞬間”に対する応答としてこの局面が切り取られた場合には、「5月28日には何もなかった」という解釈へと向かう「空気」を作り出します。だとすると、突然自分の身に受難がふりかかるひとは、まずその場で、さらには「その場」を想起しようとするたびにくりかえし「見殺し」にされつづけるということになります。様々な“受難者 / 受難民 ( homines patientes )”にどうふれるのか？ これは、人間 ( の存在 / 生存 ) への問いかけです。

大切な恩師であった真下信一先生は、「死『について』考えるのと死『を』考える」はちがうはずですが、『について』はドイツ語でüber、何かを越え出ていくという意味があり

ます。『を』が持つ臨場感を持つことなく、すり抜けてしまい、対象に食い込んでいかないのです」とおっしゃいました。私は、真下先生から“臨場・臨床の智（living knowledge）”、「誠者天之道也、誠之者人之道也（誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり）」を学びました。

ですからこの場所では、生存「について」考えるのではなく、いまやひとつのつながりをもつものとなってしまった“惑星社会の生存（Sustainable Ways of Being the Planetary Society）”「を」考えたいのです。

## 6 ふれることの困難とふりかえることの困難

いずれの問いかけも、いまふりかえればきわめて「挑発的」であり、ともすれば「懺悔」（することでの「保身」）を誘発する可能性もあり、十分に適切なものであったとは言えないかもしれない。とはいえ、この「火急の場」で、いかなる性向とともに、自己を「守り」/他者にふれようとしていたのかを記録しておくことを「エピステモロジー/メソドロロジー/メソツズ」として選択し、記録として残すこととする。

考えたかったのは、“受難者/受難民（homines patientes）”にどのようにふれるのか、それが“わがこと（my cause）”でもあることに対する“関心の欠落”があり、“没参加”的なひとが、いかにして 識ることの恐れを抱くことがらをあえて境界を越えて選び取るのか/回避するのか、さらには、その自らの内なる“無関心/関心の欠落/没参加”も含めて、どうふりかえり、どうかかわるのかという問題である。

6月18日のグループワークのなかでは、たとえば以下のような反応が見られた。

「人が倒れたときにまっさきに行動を移すのは、さらに状態を悪化させてしまった経験があるため、ためらいがあった」

「そのためらいによって時間が過ぎ、人が命を落とすときがある」

「救急手当の知識が必要」「病気や緊急救護の予備知識があれば、倒れたJ君を助けることができた」

「ふざけていると最初は思っていたから動かなかった」

「その病気については知っていて、もっと重い症状と比較して大丈夫だと思ったから動かなかった」

「高校のときにクラスメートが亡くなったが、そのあとクラスの仲間は1年間過ごすあいだにその人のことを話したりはしなかった。それ以外にやりようがなかった。ふれないこと、これが適切な対応だった」

「動かなかった」ことの理由として多くあげられたのは、「知識がなかった」と「知識があったので大丈夫だと判断した」であった。指標となっているのは「無知/既知」であり、いずれの場合も「想定内にすれば問題は解決できる」という思考態度(mind-set)を内包している。「既知の事実」との比較により「適切な対応であった」という判断によって、「模範解答」へと収斂していく力がここでも働いている。

これ以外にも以下のような反応があった。

「倒れたけど結果的に命に別状はなかったから問題ない」

「ひとが倒れることはよくあることで何もなかった(死んだわけではない)のだから別にいい」

「私だったら倒れることは『非日常』で、助けを求めて苦しんでいることを『問題ない』といわれたらいいやだ」

「以前に人が倒れたときもなにも出来ずに立ちつくした経験があった。次こそはと思ってもまた身体が動かなかった。しかしそれをどのようにして言葉にしたらいいのかわからなかった」

ここにも「既知の事実」との比較による判断があるが、他方でその判断に対して、「わがこと」であった場合を想像しての「ひっかかり」の表出もあった。

リアクションペーパーを提出しなかった、あるいは提出しても「5.28」についてふれなかった理由については、以下のような反応があった。

「(すでに『起こったこと』の)傷口をこじあけるのはよくない」

「考えなければと思っていただけ、忙しさや用事もありできなかった」

「この教室をひとつの社会だと見なす理由は何かがわからなかったので提出しなかった」

「(質問の意味や対処の仕方が)わからない」ことから「動かない」「提出しなかった」と発言したひとたちのなかに、その「ない」の判断と同時に、後からふりかえった場合でも「(自分の行動は)適切であった」という判断が組み合わされているケースも多かった。他方で「適切ではなかった」ことをどう表現していいか困惑し涙を流しながら語ったひともいた。

「死んだわけではないので特に問題ない」「教室をひとつの社会と仮定することの意味がわからない」といった発言は、「想像力や思考の欠如である」と言えるかもしれない。しかしながら、「通常の認識枠組みで処理する」ことが強く社会的に求められるメカニズムのなかで育ってきたということも看過できない。「内省せよ」と問い詰めることでは道が開けないという感触が



残った。ここから、個々人の内省を求めるのみならず、“反射的反省性（réflexivité réflexe）”を意識し、“対話的にふりかえり交わる（facendo riflessione e riflessività）”場をつくることを、課題として強く意識した<sup>15)</sup>。

しかしこのなかで、「適切だった／（今回は不適切だったが）知識を身につけ次に備える」という「迅速な反応」以外に、「想いをもちつづける／あきらめない気持ちを持ち続ける力（power of idea）」を残していく在り方として、以下のようなものもあったことは銘記しておきたい。

「医者が来てくれたらと思っていた。医者が来て安心した。しかし本当にそれで『大丈夫』だったのか、と考えつづけている」

## 7 “受難の深みからの対話” のために

人間が思想を自分のものとしてもつとは、それによって生きることができるコース cause をもつことである。そのために精神の真底から笑い、喜び、怒り、憂え、悲しむことができるなにか普遍的なもの、なにかパブリックなものをもつことである。そのとき、歴史は精神の外側に己れを展開する眺めではなくなって、自己のうちにコースそのものにかかわる出来事となる。（真下信一「受難の深みより 思想と歴史のかかわり」<sup>16)</sup>）

1930年代から「8.15」にいたる道行きを生き 戦死したり獄死したりした家族や友人の「甲い合戦」としての「戦後」を生きた哲学者・真下信一は、存在と契るような原思想の構築にむけて、「それによって生きることができるコース cause」にふれる“受難の深みからの対話”への道を模索した。多くを語らずに死んでいった個人の生の軌跡と痕跡をうけとめ 果たされなかった想い、たたかいに敗れ、汚れてしまった試みに身を投げ出したひとびとの「個人」（の「所属物」として「想像」されていたところの意図や意思、思考や思想や信条や「いきざま」）からはみ出たり、染み出したりしてしまっていた“願望”をうけとめ、掬い取ることに意を注ぎたい。たとえ、これらの試みの「創業者」たちと対立するようなことが起きたとしても、「創業者」たちについて語ったり、代弁したりするのではなく、自分ならその魂をどう引き継ぎいかなる実践をするのかを表しだしたい。そう考え、考現学と考古学、さらには故旧、故郷、縁故、故事、事故、故人など、喪失を“痛むひと（homines patientes）”の“社会的痛苦（patientiae, sufferentiae, doloris ex societate）”を引き受け探求する学問である“考故学（Sociological (anthropological) caring for the lost, “perdutologia”=una cumscientia di pèrdita）”を志してきた。

そのなかで、「3.11」は、「8.6」や「8.15」がそうあったように、認識のレベルでは、「悪しき状態」「受難」への「ペリペティア（悲劇的急転）」<sup>17)</sup>であった。「3.11」によって、私たちの「日常」を、“生存の在り方”を問いとて降りて行かざるをなくなり、“多系／多茎

の可能性 (le vie possibili verso i vari sistemi/ rizomi) が開けるのではないかと思った。しかしその、一瞬間見ええたと思った「窓」は、予想以上に急速に閉じられていった。それは外的な力であるだけでなく、個々人の内奥で生起しつづける“心身/身心現象”として起こっているのではないかと考えた。

“隔絶 (weiter Ferne, distanza abissale, Being physically close but ontologically distant)”, “亀裂/断裂 (split/rupture, spaccatura/rottura)”, たとえば、震災後に土地・仕事・コミュニティを喪失し、自らの“背景 (roots and routes)”が、裂け、ひび割れ、真っ二つになり、砕けた状態は、split mindでもある。“無関心”は、存在 (esse) のcauseの内側に (inter) 入っていかない力であり、caringの対岸にある。“関心の欠落”とは、現にそこで起こっていることに対して、契りを結ぶことから自らを引き離すというかまえである。それはまた、「没思考」であるというだけでなく、associate/engage, “存在と契りを結ぶ (s engager)”場から自らを無化させるために思考をめぐらす“没参加 (dissociate/disengage oneself)”でもある。

「3.11以降の惑星社会」を考えるなかで「5.28に起こったこと」は、少なくとも筆者にとっての「ペリペティア」であった。あの場にいた何人かのひとがそうであるように、傷口が開いたままとなっている。各自が、自分の見聞の範囲内で「病気についての知識」を語っているとき、唾の届く距離でその場にいて、「問題ない」と言われたJ君の胸中をいまま考えつづけている。そして、あの場で発した言葉、行動、それ以降の内省の在り方を、追想/追憶しつづけている (keep re-remembering, ri-cordando)。

「動かなかった」「提出しなかった」「ふれなかった」と、無関心/関心の欠落/没参加が連動しているというわけではない。“無関心/関心の欠落/没参加”と“共感・共苦・共歎 (compassione)”が、個々人のなかで、個々人の間に、どのように立ち現れ、“受難の深みからの対話”が生起するのか。その条件や指標については、まだ“探究/探求”を深めていく必要があり、今後の課題である。

「3.11以降」「を」考えるための場で起こった「5.28」は、いままでの“思行/志向/試行”の不十分さ、欠陥を認識させた<sup>18)</sup>。しかしながら、いま見えていないだけでなく、いままで見過ごしていたということを確認することは、心地よくはないが、そこに希望がないわけではない。“未発の状態”“見知らぬ明日”の常態化は、宿命論でも観念的な自由でもなく、ひとつの可能性でもあるというのが、メルッチ、メルレルとの共通認識である。生存の場としての地域社会を“探究/探求”するためには、微細な動きとして潜伏する社会的プロセスの“移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろいの道行き・道程 (passaggio)”に着目し、そこに生起する“複合・重合”的で“多重/多層/多面”の“事柄の理 (cause)”をとらえ、個々人と社会の“メタモルフォーゼ (変異 = change form)”の条件を析出する営みが求められる。

“メタモルフォーゼ”の道行き (passaggio) のなかで、実体主義か異種混交かといった対立

からも身体をずらして、肩の力をふっと抜いたときに、少しだけヒジをつけて、しかも微細な変動をしているような状態で、ぶれて、はみ出しつつ、軸をずらしながら、不均衡な動きのなかで、バランスをとりつつすすむ“ぶれてはみ出すひと（playing self）”がイメージとして在る。“流動する根”は、惑星社会の航海者にとっての「港／他者」のイメージであり、そのような航海者は、実は嵐のなかでも、凧のときでも、港でも、それぞれの場のどこかで／どこでも、安らぎ／どよめき、静止しつつ／旅立つ。

メルッチは、この“対位する身体（corpo contrapponendo）”のアンビヴァレンスとパラドクスとその豊かさを、静態的ではなく、動きのなかでとらえ表現しようとしていた。この遺志を引き継ぎ、学生諸氏と“思行／志向／試行”しているのは、“リフレクシヴで療法的なプレイング・セルフ（Reflective/reflexive & Therapeutic Playing Self）”への挑戦である<sup>19)</sup>。

「無常」や「宿命」、あるいはその逆に「想定」を前提とした「想定外」の無益な「論戦」でもなく、高みから裁くのではなく、地上から、いま／ここから始めるための認識枠組みと言葉を選んでいく。社会的プロセスの根本的な変化が始まる“根本的瞬間（Grundmoment）”はあらかじめ「予測」「想定」できない。ただ「居合わせる（Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place）”しかない。“サルベージ（沈没、転覆、座礁した船の引き揚げ、salvage, salvataggio）” 渉猟し徹底して探しまわり（scour, frugare）、踏破し（traverse, percorrere e attraversare）、掘り起こし（esumare, exhume）、“すくい[掬い/救い]”とり、くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere）”こと。つまりは、関係の根（roots of relationship）、関係の道行（routes of relationship）、“関係性の動態を感知する（perceiving the passage of relationship）”ことだ。

メルッチとメルレルならきっと、「過去のいかなる時代にも見ることがなかったほどに、相互に衝突・混交・混成・重合し、“多重／多層／多面”化した惑星社会においては、“根こそぎ”と“亀裂／断裂”、“無関心／関心の欠落／没参加”と“限界状況の想像／創造力”は、実は表裏一体を成している」というだろう。「調査研究者がそのことを察知するための学問をまだ十分に練り上げていないだけだ」と。

「限界」の認識の“他端／多端”には、構造決定論でも認識主体の無限の自由でもなく、多系の領野が在る。ただこの、多系の動きとして存在しているものを、自らの認識もまた動いていくなかでとらえていくには、「近代的な認識主体が現実を線形にとらえる」ことから“ぶれてはみ出す”必要があるのかもしれない。そう考えると、“未発”を常態とする“見知らぬ明日”は、「無限の多様性にかかれた時空」（浅野慎一<sup>20)</sup>）として在り続けているのかもしれない。いまここにある「いくつもの可能性の空」（メルレル・新原道信<sup>21)</sup>）を察知する学問を“対話的なエラポレイション”から創っていかれたらと思う。

## 8 “多系 / 多茎の可能性” にむけて

最後に、これからの課題にむけて、“多系 / 多茎の可能性” の萌芽をいくつかあげておきたい。ひとつは、「5.28以降」の「ペリペティア」に“居合わせ”てくれた講師の木村哲也さんから届いたメールである：

ほとんどの学生が「ハンセン病のことを知らなかった」「初めて聞いた」と記入しており、少なからず、驚きました。例の熊本地裁による違憲認定判決（2001年）から12年が経ち、若い世代のあいだでは、この話題がまったく風化してしまっていることを思い知らされました。これは、私の認識と想像以上の落差であり、今後、この問題に取り組んでいく際の手掛かりを与えられる経験となりました。

Jさんの勇気ある態度と、新原先生の毅然とした姿勢を思い返して、あの晩は眠れませんでした。

おそらく、Jさんとお目にかかることはもうないかもしれない。

それでも、忘れることはたぶんないだろうと思います。

いまひとつは、倒れたJ君の同級生から届いたものである：

私はその場にいませんでしたが、もし自分がその場にいたら果たして適切に動くことが出来たのだろうか。そう考えると、正直「はい」と言いきれる自信がありません。たまたま自分の身の周りで起きていないだけで、これから先、危機的状況に遭遇する可能性は誰もが持っていると思いました。他人のことを我がこととして、見・聞き・考える力が必要だと痛感しました。危機的状況に陥った時、自分に出来ることはもしかしたらないのかもしれない。しかし、だからと言って自分の大切な人がそのような状況下におかれた時、指をくわえて見ているのは嫌だと思いました。

7月15日、最後のレポート提出で、自ら名乗り出て壇上に立った学生たちはみな、講師の方を見るのではなく、正面を向いておずおずと、あるものは半ば目を閉じつつ、声をふるわせ、訥々と、言葉をつないだ。

付記：ヨーロッパ研究ネットワークでの共同研究を継承発展させることを意図して開始された新規プロジェクト「3.11以降の惑星社会」チームの協業として、惑星社会論と惑星社会のフィールドワークのメソッズについての検討を行い、本年報においては、共同研究の途中経過として、新原、

鈴木，阪口が代表して執筆している。

注

- 1) 石牟礼道子『新装版 苦海浄土 わが水俣病』講談社 2004年 359 360ページより。石牟礼の「あとがき」によれば、『苦海浄土』の「一部は1960年1月『サークル村』に発表 同年『日本残酷物語』（平凡社）に一部。後、続稿をのせるべく1963年『現代の記録』を創刊したが、資金難のため、チッソ安定賃金反対争議特集に止まり、1965年、『熊本風土記』創刊とともに稿をあらため、同誌欠刊まで、遅々として書きつづけられた。原題『海と空のあいだに』である」（同書、359ページ）。「惑星社会の諸問題」に目をむけ耳をすますなら、「水俣/MINAMATA」は終わったことではない。いまなお水銀は、日本から海外へと輸出され、金採取の現場では水銀汚染に直面しつづけている。水銀規制に関する国際会議は2013年10月9～11日に熊本で開かれ、「水銀に関する国際条約」は、「水俣条約」という名前で採択された。

筆者は、ある日突然誰かが私たちの代わりに「心情の出郷/居ながらの出郷」者となることで成り立つ構造のメカニズムを探究していく というテーマで講義をしている。「水俣で声をあげるひとたちを見てもし驚いたのなら、なぜどちらかといえば無口なひとたちが声を発せざるを得なくなったのか想像してみてください。汚染水が流されていたのは10年と少でした。しかし、その影響は終わることなく半世紀以上続いています。原田正純先生もおっしゃっていたことですが、最初に基礎調査、地域調査をすべきだったのです。行政は地域を区切って、(補償を)減らそうとします。認定条件の基準に満たない、圧倒的多数の『心情の出郷/居ながらの出郷』者がいまもこの惑星上の各地で生き続けています。国は『排水停止の後は病気は発症しない』としました。しかし、魚は人間が設定する境界線をこえて移動します。汚染物質もまた堆積し生物の体内に蓄積されつつ移動します。そして、国が定めた対象地域以外の子どもたちもまた汚染物質を口にします。これが、「惑星社会の諸問題」として考えるべき理由であり、この“線引き (invention of boundary)”の埠外とされたひとびとの受難は、『3.11以降』の現実でもあります」と。これに対して、「企業や原発が来たことで利益を享受したひとたちが、後から不平不満を言うのはフェアではないと思う。受益したひとが受難するのは当然だ」という意見が寄せられた。そのため、近現代社会において誰かが“受難者/受難民 (homines patientes)”となることへの“無関心/関心の欠落/没参加”のメカニズムを探究することの重要性を痛感させられている。

- 2) この共同研究には、A.メルレル (Alberto Merler), メルッチ夫妻 (Anna e Alberto Melucci), 古城利明, 中島康予, 柑本英雄, 田淵六郎, 藤井達也, 石川文也, 中村寛, 鈴木鉄忠, 阪口毅, 新原道信などが参加し, 研究成果を, 新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク 惑星社会の諸問題に回答するために』(中央大学出版部, 2014年)としてとりまとめた。同書の執筆には, A.メルレル, A.メルッチ, 古城利明, 中島康予, 中村寛, 鈴木鉄忠, 阪口毅, 新原道信が参加した。同書を通じて明らかとなった『“境界領域”のフィールドワーク』以降の課題は, すでに“出会って”いた“惑星社会の諸問題”に真正面から取り組み, とりわけ「3.11以降」の「“惑星社会”と人間の『物理的な限界』から始める」ことである。つまりは, 定型化した「問題解決」によって向き合うべき根源的な課題をやり過ごし「先送り」していくという思考態度 (mind-set) から“ぶれてはみ出す”こと。手元に蓄積された“知恵 (sapientia)”や“智恵 (sapere)”を全否定するわけではないが, これまでの「知」の枠組みや組成を一度は手放すことを恐れないこと, ひとまず解きほぐす (unlearning) ことへの勇氣を持って, 「のみの市」のように“衝突・混交・混成・重合”した, 手元にあるばらばらの諸要素でのプリコラージュ (bricorage) を試みること。「人文的な素人 (humanistic amateur)」として, “素人の学 (cumscientia di amatori)”を「普請」し直すことが, 「3.11以降」の焦眉の根源的な, 「深い」課題となった。



- 3) 「3.11」から一年後、神奈川県秦野市の市民団体に招かれた最首悟は、「重度障害をかかえた娘を連れて急いでどこかに逃げ出すことは不可能です。どんな事態となっても“ここに居る”しかありません。だから、地球上のすべての原発をゼロにすべきである、放射性廃棄物の入った瓦礫をあらゆる自治体・住民は全面拒否すべきだ、という“極論”を言いたいのです」と言った。ここでの発言には、「超越的な知識人」としてでなく「障がい者を家族に持つ老人」としての“偏ったトタリティ (totalità parziale)”，“生存の場としての地域社会”から“智”を産出するという「エピステモロジー／メソドロギー／メソツ」と「価値言明」があった。Cf. 最首悟『星子が居る 言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房、1998年。
- 4) 上野英信が見続けようとした「棄民／棄国」については『出ニッポン記』の下記の記述を見ていただきたい：

いよいよ別れの日がきた。一夜語りあかした伊王島の青年 [長崎港外の伊王島炭鉱で働いていたという青年 (引用者補足)] が、私の手をかたく握りしめていった。

「三池のみなさんによるしゅう伝えてください」

ほかの連中も彼につづいていった。

「俺からもよろしゅう！」

「俺からもほんとうによるしゅう！」

「三池だけは忘れんけんなあ！」

誰の眼もうるんでいた。伊王島の青年だけではない。みんな、「三池だけが日本の思い出」なのであった。……この国の地底深くとじこめられた“下罪人”にとっては、三池こそ、呪われた日本という国の底の底であると受けとめられていたからである。……「三池だけが日本の思い出」といい、「三池のみなさんによるしゅう」という。それはそのまま、日本という国のもっとも深い地底に生きながら葬り去られた自己自身に対しての、哀切な決別の挨拶でもあるのだ。そして、まさに棄国とは、そのようにみずからを、この国のもっとも底部に生き埋めにした人間のみがとることができる行動であり、思想でこそあれ、単に棄民があれば棄国があるというような論理のあやではない (上野英信『出ニッポン記』社会思想社、1995年、41-42ページ)。

上野はここで、なぜ特定のひとだけがこうした「決断」をしなければならなかったのかという問いを発している (いま [3.11以降] の“受難者／受難民”が直面している問いでもある)。構造の変動に翻弄されつつ、個々人はどうやってこの「荒波」をわたろうとしていったのか。筑豊からアマゾンへ。「希望の大地」フンシャル。福岡や北海道からの炭坑離職者が集団で住む。1960年前後、移民の六割は炭坑離職者だった。自治体はノルマを決められて炭坑離職者たちを海の向こうへと送り出した。「希望の大地」フンシャルは日本国の直轄移住地のひとつだったが、そこには農業を受け入れない過酷なジャングルがひろがっていた。農業経験のまったくないヤマの民は、予想以上の逆境のなかで出発せざるを得なかった。ブラジルへとわたった移住者は、黒い表紙の『炭坑離職者求職手帳』で年金を受け取ることが出来なかった。「のこった」もので、原子力発電所でも下請けをしたものもいた。そして、「出ていった」ものたちの多くは、農業を諦め都市へ、さらには海の向こうへと「帰国」し職を求めた。

イタリアから南米への移民の動態を研究した社会学者メルレルは、ひとの移動について、「移動はまたある所与の状況の外に出ること (emigrare) であると同時に、新たな状況へと入り込むこと (immigrare) であるが、それは、度重なる多方向への旅 (帰還し、再び旅立ち、再び入植し、複数の場所の間で、一定期間をおいて繰り返す移動しつづけること) を繰り返すという ひとつの再帰的な旅 をしつづける状態を意味する。この観点からするなら、たまたまあるものが特定の土地に留まり『定住している』という現象は、この循環し再帰し多系的に展開していく旅の一場面を見ているということになるだろう」(Alberto Merler, "Mobilidade humana e formação do novo povo /



L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse" (= 新原道信「世界の移動と定住の諸過程 移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 63-64ページより引用)と述べた。しかしこの、筑豊から南米へ、さらに日本の地方へという「ひとつの再帰的な旅」は、「棄民/棄国」と結びついており、これからつづいていくであろう「避難」の道行きを暗示させるものとなっている。

- 5) “廃棄 (dump[ing])”については、新原道信「A.メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに 3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号(通巻253号), 2014年3月, 41-66ページで論じている。“廃棄物の発明 (invention of refuse)”“造り出された廃棄物 (invented refuse)”は、物質循環や生態系のなかで溶解することなく、流動し、残存し、生物の体内に蓄積し、人間の身体へと到達し、“廃棄物の反逆 (rivolta dei rifiuti, revolt of refuse)”が現象するという見方である。ラテン語系の言葉であれば「廃棄する = abbandonare (leave, abandon)」, 「廃棄 = rifiuti (refuse, waste)」となるが、日本語の“廃棄”に相当するヨーロッパ言語として選択したのは、中期オランダ語 *dompen* の「沈める」「埋める」、スウェーデン放言 *dompa* の「ドスンと落とす」などに由来する *dump[ing]* である。*dump* は、ゴミを捨てる・投棄する、人を見捨てる・見限る・放り出す・首にする、ひとに押しつける、過剰移民を外国に送り出す、責任を投げ出す・転嫁する、考え・政策などを棄てる・やめる、過剰商品を投げ売りする、汚物や核廃棄物を海や陸に棄てる、人をだます・弱みにつけこむ・けなす・こきおろす・やつあたりする・破滅させる・殺す、吐く・もどす、患者をたらい回しにする、などの意味を持つ。患者の廃棄、外国人の廃棄、地方の廃棄、不採算部門の廃棄、価値の廃棄(民主主義とか、内面の自由とか、平和とか平等とか思想とか、そのような人間的価値の廃棄など)、自然、地域、価値、願望、“良心(の呵責)/罪責の感覚”、何よりも人間そのものの廃棄の問題が含まれている。「廃棄する (dispose, throw away [out], scrap, cancel, dump)」「廃棄されたもの (garbage, rubbish, junk, waste, trash, dust)」「廃棄物処理 (a refuse landfill, a garbage dump, RDF (refuse-derived fuel))」「ゴミ収集人と廃棄物処理事業 (a dustman, a waste management business)」「[無許可の]ごみ廃棄場 [放射線廃棄物の]処理場 (dumping ground)」「有用な人材 (a useful [valuable] person, a person of service to the nation state)」「無用のひと/有害なひと (a useless [unserviceable, unhelpful, unwanted] person / pest)」「プルトニウムと劣化ウラン弾 (Plutonium, Depleted uranium ammunition)」などの含意から「ゴミ」「瓦礫」「廃棄物」、「役に立たないもの/ひと」「不要物/有用な人材でないひと」「毒物/(社会の)害虫(とされるひと)」「廢材/廢人」なども含めて、“廃棄 (dump[ing])”“廃棄物の発明 (invention of refuse)”“造り出された廃棄物 (invented refuse)”“廃棄物の反逆 (rivolta dei rifiuti, revolt of refuse)”を考えている。
- 6) 本研究チームは、地域社会学会を中心として、地域の“生身の現実”と真摯にふれようとする他の研究者との交流をすすめてきた。2014年度第2回研究例会(2014年10月4日, 明治学院大学)では古城利明が「3.11以後のリージョンとローカル 東アジア・日本を中心に」、第3回研究例会(2014年11月29日, 同志社大学)では新原道信が「生存の場としての地域社会の探究/探求」、第4回研究例会(2015年2月7日, 首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス)では鈴木鉄忠が「『歴史的地域』の再構築 北アドリア海圏国境の市民文化活動を事例に」と題する報告を行った。「3.11以降」の日本の地域社会の状況については、第2回研究例会の浅野慎一(神戸大学)の報告「国土のグランドデザインと『生活圏としての地域社会』」、第4回研究例会の平山洋介(神戸大学)の「阪神・淡路から東北へ 住まいを再生する」も含めた地域社会学会での一連の議論から多くの示唆を受けている。
- 7) 「過剰適応」「模範解答」については、経営学者の野中郁次郎たちの共同研究(野中郁次郎他『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』中公文庫, 1991年)から示唆を受けている。状況認識能力の欠如

に関する過去と今日の相似形（日本軍の失敗と今日の企業組織の失敗）について、野中郁次郎は、以下のように述べている。日本軍の失敗の本質とは何か。「戦略的合理性以上に、組織内の融和と調和を重視し、その維持に多大のエネルギーと時間を投入せざるを得なかった」「過去の成功への『過剰適応』」「日本軍のエリートには、狭義の現場主義を超えた形而上学的思考が脆弱で、普遍的な概念の創造とその操作化ができる者は殆どいなかった」「自らの依って立つ概念についての自覚が希薄だからこそ、いま行っていることが何なのかということの意味がわからないままに、パターン化された『模範解答』の繰り返しに終始する」「一九八〇年代末から顕在化した世界秩序の枠組みの増幅的な変動と模索の過程の中で湾岸戦争が生じた。これに対するわが国の対応の仕方は、本質的議論を避け、まさに主体的に独自の戦略概念を形成することができないという、自己革新能力の欠如を確認する以外の何物でもなかった。不確実性が高く不安定かつ流動的な危機的状况では、日本軍にみられたような戦略・組織特性は有効に機能しえず、さまざまな組織的欠陥を露呈したのであった。いまでは「概念創造能力の不在を、第一線現場での絶えざる自己超越や、実施段階における創意工夫による不確実性吸収だけでカバーすることができなくなってきた」「なぜなら、このようなやり方は、既成の秩序やゲームのルールの中で先行目標を後追いつする時のみ、その強みを発揮するからである」「グランド・デザインや概念は他から与えられるものではなく、自らが作り上げていくものなのである」（同書、409-412ページ）。

いま私たちは 根本的な変化の時代に直面している。そしてこの惑星の運命そのものにとっても「決定的（critical）」な影響が生じているが故に、「危機の時代」としても意識される。しかし、直面しているのは、時代の危機的状况そのものであるのみならず、「危機の時代」についての膨大な言説の製造という事態でもある。危機をうっすらと感じてはいるが、それは、行動の指針とはならない（memento moriへの“無関心／関心の欠落／没参加”を選択し、眼前の状況への“過剰適応”を反復する）。他方で、事物の変転を知識としてとらえる知の専門家は、「危機」と「安定」の二項対立を前提とした上で、危機を本質的なものとはとらえず（「危機」はあくまで「病理、機能不全」であり）、既存の分析装置によって、この「新たな状況」への「迅速」な「対処」と「説明」を試みる。むしろこの状況認識能力の欠如こそが危機そのものなのかもしれない。

個人的がんばりでは対応しきれない時代状況なのにもかかわらず、「過去の成功への『過剰適応』」の連鎖が存在しつづけている。ここには、徹底した他者感覚のなさが存在している。困難な時には身体を閉じ、うまくいっているときにはひたすら傲慢になる。「根本的に考えた上で」「きっちり将来予測を立てた上で」などと言いつつ決断を先送りし、外見だけ変えれば、中身は変えないで済むと思っていたのが、どうも雲行きがあやしくなったと驚き、なんとか少しでも火の手を逃れようと必死に身をよじる。私心は、「グローバルスタンダード、国際競争に乗り遅れないために」といった公的な言説によって覆いかくされ、その言説に対しては「全肯定」以外は認められない。際限なき妥協・撤退と保身の「狡知」によって共犯者の群れが形成される。さらに、同じ書式（枠組）で「改革のため」の模範答案を書くことの競争がされる。そこでは統一書式への「帰依」だけが重要となり、その実質は問われない。かくして、「他者感覚のなさ」「憶面のない自己中心」、「皮相な反応」、「退嬰主義」が蔓延する。かつての日本の軍隊組織に根付いていた過剰適応と無責任の連鎖をもち「狡知」の知の在り方、すなわち、一定の枠組みの枠内ではきわめて迅速に思考し処置し反応するが、自らを拘束する枠組みそのものを考察し、枠組みそのものを創りあげることに対する“無関心／関心の欠落／没参加”は、今日においても命脈を保っている。いやむしろ、「危機」に直面することで、その判断力のなさは、より鮮やかに露呈している。つまりは、「古層」（丸山真男）のレベルにおける過去との連続性と同時に、この知の枠組みは一部のエリートのものから、より大衆化し、内面化し、身体化し、固定化するというプロセスが不可逆的に進んだ。ここでは、膨大な量の知が運用されるが、その実質や意味についての吟味が根本的になされることはない。この意味での無知を前提

とした努力や善意は、その意図とは逆の結果をもたらす。ならば、こうした「優等生」は、この過剰適応と無責任の連鎖、亀裂、抑圧移譲の連鎖からいかなるきっかけをもって離脱・退却するのか。これが本稿の課題である。

- 8) “限界状況の想像／創造力 (imagination/creativity of limit-situation)”については、新原道信『『3.11以降』の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力” 矢澤次郎, A.メルッチ, J. ガルトゥング, 古城利明の問題提起に即して』『成城大学 社会イノベーション研究』第10巻, 第1号, 2015年, 1-21ページにおいて, 考察に着手している。 “創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”に深い関心を寄せていたメルッチは, 惑星社会における個人々の「日常」と「社会的事件」との関係性について以下のように述べている:

来る日も来る日も, 私たちは慣習的な行動をとり, 外的 (external) であったり私的 (personal) であったりするリズムに合わせて動き, 数々の記憶を育み, 将来の計画を立てる。そして他の人々も私たちと同じように日々を過ごしている。日常生活における数々の体験は, 個人の生活の単なる断片に過ぎず, より目に見えやすい集合的な出来事からは切り離され, 私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし, 社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは, こうした時間, 空間, しぐさ (gestures), 諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて, 私たちがしていることの意味が創り出され, またこの網の目のなかにこそ, センセシヨナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている (Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年 = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『ブレイング・セルフ 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 1ページ)。

- 9) 本稿は, “無関心” “関心の欠落” “没参加” と対置される “無償性の交感 / 交換 / 交歓” をテーマとして書いた論稿である新原道信 “交感 / 交換 / 交歓” のゆくえ 『3.11以降』の惑星社会を生きるために (似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民 第II巻 支援とケア: ころる自律と平安をめざして』東京大学出版会, 近刊予定) と “対” をなしている。同稿は, ご両親が飯館村の出身で福島県浜通りの北部に位置する町に育ち, 地元の進学校から東京の大学に進学, 飯館村が注目されるようになった。数年前に, この父祖の地で調査し, 中学生の声を聴き, 卒論を仕上げた卒業生とのやりとりをもとに執筆した。 “交感 / 交換 / 交歓” のゆくえ は, 『3.11以降』を生きるごくふつうの個人である “彼女” の微細な動きと網の目と, 大きな社会のうねり, “集合的プロセス” との “関係性の動態” を感知する (perceiving the pulse of relationship) ことを企図している。
- 10) 「惑星社会における人間と意味」という副題が付けられたメルッチの理論的主著『ブレイング・セルフ』の冒頭には, 「惑星としての地球」そして「境界領域への冒険」という言葉が登場している:

私たちは, グローバル化社会となった惑星で生活している。それは, 外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって, 完全に相互に結合していく社会であるが, しかし依然として, そのような介入の手が届かない本来の生息地である惑星としての地球 (the planet Earth) に拘束されているような社会でもある。社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という, 惑星としての地球の二重の関係は, 私たちがそこで私生活を営む “惑星社会 (the planetary society)” を規定している。

……本書を通じて私が望むのは, 比較的に目に見えやすい集合的なプロセスが個人の体験や日々つくられる諸関係とふれる場である境界領域 (frontier territories) への冒険である。……惑星としての地球に生きていること責任 / 応答力が, 私たちすべての手に委ねられているということも明らかになってくる。したがって, 私は, 社会の関係性と諸個人の体験とを二つの軸とした, 循環し, 迂回していくような道筋を本書で探究しようと思っているのだ。……私の視線は, 人間の行為の様々に異なった領域が相互にふれあい, 相互浸透しているような場所である境界領域に

集中することになるだろう。このフロンティアこそが、私が読者を招き入れ、ともに旅をしたいと思っている場所である（前掲書『ブレイング・セルフ』訳書の3ページ, 57ページ）。

「9.11」からアフガニスタン、イラク、世界金融危機、さらに東日本大震災と、システム化・グローバル化がもたらす個人個人の社会的痛苦に起因する社会紛争と社会危機はきわめて深刻な国際社会問題となっている。こうした複合的問題（the multiple problems）は、可視的な制度等に注目する「国際・社会学」あるいは「地域・社会学」、可視的な出来事を対象とする社会運動論でとらえきれなくなってきた。膨大な事例研究を基礎づける理論と方法の不十分さが指摘されており、「国際社会そのものに関する学（惑星社会論）」、システム化・グローバル化する地域社会で現に起こりつつある動きをとらえる理論・概念・カテゴリー（「未発の社会運動論」）が求められている。本研究チームによって、「惑星社会論」と「未発の社会運動論」のさらなる展開と拡充を実現すれば、イタリア、日本社会のみならず、世界各地で生起しつつある微細な動きが、これからの惑星社会にもたらす意味をとらえることが可能となり、波及効果はきわめて大きいと考えている。メルッチの惑星社会論については、下記の論考を参照されたい。新原道信「A.メルッチの「創造力と驚嘆する力」をめぐって 3.11以降の惑星社会の諸問題に回答するために」『中央大学社会科学研究所年報』18号, 2014年, 53-72ページ。

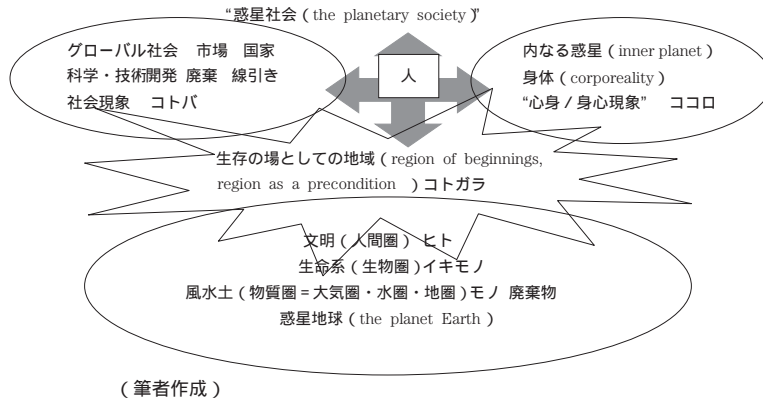
- 11) “未発の状態 (stato nascente, nascent state)” “未発の社会運動 (movimenti nascenti, nascent movements)” については、新原道信「“未発の状態 / 未発の社会運動”をとらえるために 3.11以降の惑星社会の諸問題への社会的探求」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号（通巻258号）2015年, 43-68ページでこれまでの理解をとりまとめている。もともとこの言葉は、化学反応における「発生期状態 (nascent state)」という意味を持っている。物質が化学反応のなかで高い反応性を持つ状態であるが、「不確定性原理」と組み合わせて考えてみるならば、化学反応が顕在化する瞬間を観察しようとするれば、その観察行為によって対象には再配置 (reconstellation / ricostellazione) が起こってしまい、変化の“道行き・道程 (passaggio: 移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろい)”を「線的」にとらえ「予測」「想定」することはできない。しかし、一定の「配置図」で「事」や「物」が置かれることによって、“メタモルフォーゼ (変身・変異)”を誘発する可能性が高い状態におかれるというものである。本研究グループは、メルッチ、メルレルなど海外共同研究者との間で、日本とイタリアの住民意識、集合行為、社会運動と内発的發展、持続可能な地域社会構築に関する調査を行ってきた。その成果に基づき、深部からの要求を把えるための理論として、“未発の社会運動 (nascent movements)”論を錬磨した。未発の社会運動は、目に見えるかたちで顕在化した社会運動 (合目的な集合行為) の「可視的局面」の背後で、諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的局面」を把握するための概念である。この概念は、アルペロニーの「発生期」、メルレルの「社会文化的な島々」、メルッチの「可視的局面」「潜在的局面」「自らの弱さを識る主体」、新原の「小さな主体」、また、日本の民衆史・社会史・社会学から、鹿野政直の「未発の一揆」、色川大吉の「未発の契機」、鶴見和子の「内発的發展論」などに由来する。惑星社会の問題に回答する未発の社会運動論が注目される契機となったのは、東日本大震災である。津波・震災・原発事故は、確率的になされた想定によって社会を制御する理論と方法の限界を突きつけた。成長の限界と想定外のリスクのもとで現れる複合的な問題に回答し、諸個人の声を反映した地域社会構築をするためには、深部からの要求をすくい取ることが必要となる。古城利明は、東日本大震災以降の状況を、惑星社会の問題の顕在化としてとらえ、“生存の在り方 (Ways of being)”まで降りていくメルッチ・メルレル・新原の未発の社会運動論と生存の場としての地域社会論の重要性を指摘した。似田貝香門や吉原直樹は、脱領域的・流動的・状況的・非制度的な「弱い主体」に着目し、新原も寄稿した似田貝・吉原編の近著『震災と市民』において、「被災者の『身体の声を聴く』」ことを提起した。歴史学者の間でも「生存」に軸足を置いて東北の近現代史を掘り起こす試



みがすすめられ、本研究グループメンバーも、震災以降の状況に応えるための研究成果を公刊してきた。戦後体制の構造転換という日本社会と共通の課題を抱え、深刻な若年層の問題や財政危機、「民営化」反対の社会運動などが噴出するイタリアにおいても、惑星社会論と未発の社会運動論への注目が高まっている。メルッチと新原の議論 ( Michinobu Nihara, “Homines patientes e sociologia dell ascolto”, in Luisa Leonini ( a cura di ), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria. In ricordo di Alberto Melucci*, Guerini, Milano, 2003, pp.195-206) を、イタリアの社会学者ボヴォーネ ( L. Bovone ) たちが取り上げ ( Bovone, L., *Tra riflessività e ascolto. L attualità di sociologia*, Roma: Armando editore, 2010 と Chiaretti G. e M. Ghisleni ( ed. ), *Sociologia di Confine: Saggi intorno all'opera di Alberto Melucci*, Milano-Udine: Mimesis Edizioni, 2010) , 新原がイタリアでの国際シンポジウムに招待され、各方面から未発の社会運動論のさらなる展開と拡充が求められている。

- 12) 自己の“生存の在り方”の見直し ( ways of living から ways of being にかけての意味の産出 ) については、新原道信「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学15 社会運動』東京大学出版会、2003年、139-156ページを参照されたい。歴史学によるアプローチとしては、大門正克、「『生活』『いのち』『生存』をめぐる運動」安田常雄編、大串潤児他編集協力『社会を問う人びと 運動のなかの個と共同性』岩波書店、2012年、168-196ページ。地球科学など他の学問分野によるアプローチとしては、鳥海光弘・鹿園直建・松井孝典他『岩波講座 地球惑星科学 1~14巻』岩波書店、1996-1998年。高谷好一、「『世界単位』から世界を見る 地域研究の視座』京都大学学術出版会、1996年。栗原康『有限の生態学』岩波書店、1975年などを参照している。

“生存の場としての地域社会”の背後には、“地域 ( terra, region, territory, field, element )”さらには、“地 ( terra, terrain/ground/soil )”と“場 ( luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione )”があり、“地”の固有性と行き会う / 生き合うことで蓄積されてきた“智恵 ( saperi )”“智 ( cumscientia )”“臨場・臨床の智 ( living knowledge )”が在る。“生存の場としての地域”は、モノ [ 風水土 ( 物質圏 = 大気圏・水圏・地圏 ) ], イキモノ [ 生命系 ( 生物圏 ) ], ヒト [ 類的存在としての人類の文脈 ( 人間圏 ) ] によって構成される。ひとつのローカルな単位となった“惑星社会”を支えている“生存の場としての地域 ( historical region, region of beginnings, region as a precondition )”は、“廃棄 ( dump[ing] )”も“線引き ( invention of boundary )”もできないひとつの単位として存在している。「市民」「国民」「正常」「健全」といった「区分」(“線引き”)によって生じる「選別・排除」によって、「外部」へと「移譲」したり、根絶・排除することが出来ない“異物 ( corpi estranei )”が ( 再帰的な移動をしつつも ) 常住する。学問 ( 危機の時代の総合人間学としての社会学 ) は、《モノ ( 物財 ) コトバ ( 意識, 集合表象 ) ココロ ( 心身 / 身心現象 ) の“境界領域”にあるコトガラ ( “事柄の理 ( = ragioni di cosa/causa, cause ) ”) を“探究 / 探求”する営み》である。“生存の場としての地域社会の学”は、《社会構造の“移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろいの道行き・道程 ( passaggio )”に着目し、そこに生起する“複合・重合”的で“多重 / 多層 / 多面”の“事柄の理 ( = ragioni di cosa/causa, cause )”をとらえ、個々人と社会の“メタモルフォーゼ ( 変異 = change form / metamorfosi )”の条件を析出する営み》である ( 下記の「惑星社会の図」を参照されたい ) 。



13) ここでメルッチの“リフレクシヴな調査研究( Reflective/reflexive research, Ricerca riflessiva/riflessa (triR) )”における「あくまで可能な筆写 (trascrizione)」と石牟礼の「記録主義」は共鳴する。“リフレクシヴな調査研究”の骨格は以下のようなものとなる：

“よりゆっくりと、やわらかく、深く、耳をすましてきき、ささえ、たすける”場をともにつくる。

社会を分析するだけでなく社会を分析しているつもり自分自身についても同時にふりかえり、社会にむける「果敢」さを自分にもふりむける“臨場・臨床の智 (living knowledge) ”の身体化。

グループでの“フィールドワーク (learning/unlearning in the field) ”によってhumility, humble, humilis (高みから裁くのではなく、その場においていき自分そのものを変えていくかまえ) を身体化していく。

《研究の方法》

1. 絞り込まずにあらゆるものを集める (すべてについてなにごとかを識る)。

“大量で詳細な記述 (acumen, keeping perception/keeping memories)”

2. 集めた情報を他の事実と対比・対話・対峙し意味づけをする。対位法

不断/普段の営みとしてのリフレクション (再解釈) ……一度はつくりあげた解釈を、何度もつくり変えていく。

《叙述の方法》

3. 集めたデータを複数の目で、見て複数の声を聴き、複数のやり方で書いていく。

“ぐいっと呑み込む、書き/描き遺す、刻み込む (keeping perception/keeping memories) ”、“生身の現実” にふれつづけ、絞り込まずにあらゆるものを集め、記憶していくこと、日々の暮らしの中で、(他者/他の場所・時間/他端/多端との) ポリフォニックでディスフォニックな記憶を身体に刻み込んでいくことについては、前掲書『境界領域』のフィールドワーク』第3章の新原道信「境界領域」のフィールドワークの『エピステモロジー/メソドロロジー』を参照されたい。

「あくまで可能な筆写」という言葉は、前掲書『境界領域』のフィールドワーク』第2章に収録したメルッチの遺稿「リフレクシヴな調査研究にむけて」に登場する：

私は、これまで日常生活における諸活動に関して、“創造力 (creatività) ”という概念によって調査研究をすすめてきた。そこには、調査に協力してくれた当事者との間のコミュニケーション行為、そこで調査者との間に築かれていた関係性についての一貫した深い関心があった。そのなかで、この関心をさらに深化させ、観察における調査者側のコミュニケーション行為を把握することを欲した。すなわち、その調査は、調査研究グループ自身の自らへのリフレクションを含みこみ、



そこでは、そのリフレクションの結果も調査の成果に組み込まれるというものである。しかしながら、こうした調査の成果のなかに、現実がすべて描き尽くされるわけではなく、あくまで可能な筆写 (trascrizione) のひとつであるに過ぎない。…… (「想像力」に関する調査をすすめるなかで) ジレンマに直面したことによって、かえって重要な意味を持ったのは、『創造力』に関する実質的な定義を確定してしまわずに、当事者との対話や調査メンバー間の対話のなかで、解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論 (teorie disponibili) を創ろうとしたことだった。そこでは、ことなる文化的背景を持った専門的集団が、それぞれに創造力を生み出している。調査のプロセスにおいては、大きく揺れ動きつつも、客観的な立場に立つということも、リフレシヴでありつづけるということも、避けて通ることは出来ず、自らが生産する知や認識のあり方 (流儀) の特徴に対して持続的な注意を払うとかまをを保ちつつ、このエピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかない。…… こうして、創造力という概念には複数の意味が組み込まれたものとなり、この認識のあり方が調査研究グループ内部にも組み込まれ、これまでの調査研究のプロセスそのもののなかにある多重性が顕在化した。この自らに対してもしリフレシヴな調査研究の実践を通じて、社会を認識するための調査研究の意義を鼓舞する多元的で双方向的な性質の意義を再確認したのである (Alberto Melucci, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama. = 新原道信訳「リフレシヴな調査研究にむけて」新原道信編『境界領域』のフィールドワーク 惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部, 2014年, 102-103ページ)。

- 14) “傷つきやすさと整合的な議論の組み合わせ (combination of vulnerability and rational argument)” は、「dogmatic voice providing the *ipsissima verba* (独断的な言葉)」すなわち “ipsedixit (he himself said it) = 権威をもったものからの独断・断定” をする「識者」の位置から“ぶれてはみ出す”ための方策となる：

女性と小説について講演を依頼されたウルフは、最初こう考える。結論は決まっている。女性は、もし小説を書こうとするなら、お金と自分自身の部屋をもたなければならない。ただ実際に講演するとなると、この結論を述べてそれで終わりにはならず、この結論という命題をふくらませて、整合的な議論を組みたてねばならない。そのため彼女は、つぎのような方法をとる。「人ができるのはただ、なんであれ、自分のいだいている意見を、自分はどのようにして、いкакようになつたのかをつまびらかにすることだけである」。自分の議論の楽屋裏をさらけ出すことは、ウルフによると、いきなり真実をしゃべることとは異なる行為である。おまけに、ことが男女の問題になると、結論をだそうものなら、かならず論争になってしまう。そこで、「聴衆のひとりひとりが自分の手で結論を導きだせるようなチャンスを、聴衆にあたえるにこしたことはない。そのためにも、聴衆に、語り手の限界や、語り手がいкак偏見や個人的嗜好をとくと観察してもらうのだ」。戦術としてみると、これはもちろん武装解除であり、みせたくもない個人的事情をさらすというリスクもある。しかし、わが身の欠点をさらけだしつつ、整合的な議論を展開することによって、自分の話題にふさわしいとっかかりをウルフは手に入れることになった。彼女は、決定的な言葉をもたらす独断的な予言者としてしゃべるのではなく、知識人として、女性という忘れられた「弱き性」を女性にみあった言葉で表象するのだから (Virginia Woolf, *A room of one's own*, London: Hogarth Press, 1929 = 川本静子訳『自分だけの部屋』みすず書房, 1999年, 5ページ; Edward W. Said, *Representations of the intellectual: the 1993 Reith lectures*, London: Vintage, 1994 = 大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社, 1998年, 69-70ページより)。

- 15) 「組織内の融和と調和」への動きは、くりかえし生起し、そして形骸化、さらには“異物への過剰な拒否反応 (strafobia)”へと向かう。「自分の気持ち」や「家族の気持ち」が旅程の大半であり、残されたわずかな旅程において、「外界」は、モーセの古話のように道を開いてくれるという感覚が身

体に刻み込まれている。これは特定の個人の特質というより、「システムに対して忠実であれば、外界はやさしくしてくれる（長いものにまかれれば大丈夫）」「忍従による成功」という思考態度（mind-set）である。「これまでの人生」においては、不条理な否定・排除を（存在論的に）回避することができた。もしくは（認識のレベルで）現存する不条理な否定・排除への“無関心／関心の欠落／没参加”を確保することができた。それなのに「なんで水を差すようなこと言うの？」といった素朴な疑問やいらだちに対して、どうかかわるのか。誰がこの“見かけ倒しの拙速社会（società fittizia e rapida）」から“ぶれてはみ出す”のかは、特定が困難で、偶然性と偏差がある。ここから“ぶれてはみ出すひと（playing self）」となるためには、日常的な“異物感”が必要となる。そのために、他者の声を聴くこと、内省して閉じていくことと、他者との間で照り返し開いていくことの「動きのなかの」“不均衡な均衡（simmetria asimmetrica）」が必要となる。

手がかりとなるのは、ブルデューの“反射的反省性（réflexivité réflexe）」である。ブルデューは「後からことがらの正否を論評するのではなく、ことがらとかかわることへと自らを揺り動かすことから始めることの出来る反射的反省性（c'est-à-dire une réflexivité réflexe, capable d'agir non ex post, sur l'opus opertum, mais a priori, sur le *modus operandi*）」の“かまえ（disposizione）」を自らのうちにつくる必要があるとした（Pierre Bourdieu, *Science de la science et réflexivité*, Raison d'agir, Paris, 2001, p.174より筆者が訳出）。他者との間で照らし合っていくような在り方を、メルツ、メルレルと新原は、“対話的にふりかえり交わる（fare riflessione e riflessività）」とした。たったひとりて異郷／異教／異境の地に降り立つなかで、対話的にふりかえり交わる、ひとりではなかなか出来ない“喪失”“限界”を受け入れ既存の枠組みを“手放す”“臨場・臨床の智をと共に創る（co-creating the living knowledge）」試みである。毎回手痛い「失敗」「挫折」を繰り返しつつも、講義やゼミやフィールドワークの場においては、この“たったひとりて異郷／異教／異境の地に降り立つ”ことと“対話的なエラボレーション”により“臨場・臨床の智をと共に創る”試みをつづけ、貴重な“ふりかえり／照り返し”の機会をつくっている。

- 16) 真下信一「受難の深みより 思想と歴史のかかわり」〔1957年〕『真下信一著作集 5 歴史と証言』青木書店、1980年、190ページ。「コース cause は単線的なイメージの因果関係における「原因」ではない。生存の“根（radice）」として在るものだ。削られ、埋め立てられ、「山河」を喪失する“受難の深み”から、飯館村で、六ヶ所村で、陸前高田で、声が発せられる。キリスト教では、「受難者」とは端的にキリストである。「3.11以降」、ミミズやダンゴ虫、イノシシ、鮎たちにとっての「受難」をもたらししている。プロジェクト科目の共通の土台となっていたのは、ごくふつうのひとの cause と、その声を“引き受け／応答する（responding for/to）」ものの cause の切り結び方だった。特定の間人同士が、それぞれ「受難の深みより」出てくる記憶と言葉を持ち寄り、よりゆっくりと、やわらかく、深く、耳をすましてきき、勇気をもって、たすけあう（lentius, suavius, profundius, audire, audere, adiuvare）、この惑星に一瞬存在した“生・体（corpus corporale）」として、自らと宇宙を識ろうとしたわずかばかりの智への試みであった。
- 17) 真下信一は、イブセン、G. ルカーチの系譜をふまえつつ、「主人公たちの頭と心のなかで『無知から知への急転』がそこで生じねばならないはずの『認識の場』であり、ドラマの窮極の意味が『そうであったのか!』というかたちで了解されるべきラスト・シーン」として「ペリペティア」という概念を置いた：

いかなる事実にも、いかなる出来事の新しさにも、あたかも絶縁体でしかないようなファナティシズムを別とすれば、八・六と八・一五は日本のファシスト的戦争劇における最大のペリペティアであった。主人公たちの頭と心のなかで「無知から知への急転」がそこで生じねばならないはずの「認識の場」であり、ドラマの窮極の意味が「そうであったのか!」というかたちで了解されるべきラスト・シーンであった。もとギリシャ語のペリペティアは、ことに、悪しき状態への、

人間的災禍への急変という意味をもつものであるが、八・六と八・一五のパニック、自己をも含めてこの国民の最大の災禍をかかえるものとして率直にみとめ、つづいて「最後に」このような「結果としてあらわれ」たものが「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」していたことを承認し、この確認にもとづいてあの「本質」をたぐりだし、その「本質」への自己のかかわり合いを明らかにしようとする、このことが責任性の問題一般が生じうる必須の条件なのである。

「八・一五」をわれわれは見た。それは事柄の事実的経過のなかで「うわべのまやかし」が一枚一枚と剥ぎとられてゆくそのとどのつまりに、むき出しの「本質」としてあらがいがたく目前に横たわったものであった。それを各自が見たと思ったそのイメージを保ちながら、あの歴史的経過を逆にたどれば、数々の「うわべのまやかし」が、あたかもフィルムの逆回転のなかでのように、一枚一枚と各自のもつ「本質」のイメージの上へ戻されてゆく。この後からの積み戻しのなかでは、新しく暴露された諸事実の知識が加えられつつ、ひとは事実的経過のなかにかつて巻き込まれていたときよりも、はるかに聡明にふるまうことができる。「本質」のイメージは多少とも見直され、この見直された「本質」観が、かつての自己に對置される。それゆえに、各人の自己批判、自己責任の追及の仕方は、「本質」のそれぞれの見直し方に相対的であるよりほかはない（真下信一「思想者とファシズム」『真下信一著作集 第2巻』青木書店、1979年、165-167ページ）。

“未発の状態”は、認識論としては、プロセスの連続性のなかでの認識主体の側の根本的な転換（「ペリペティア」）となる。そこには、「想定」のコントロールの不可能性、メルツチが言うところの「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由（a freedom that urges everyone to take responsibility for change）」、「限界を受け容れる自由（free acceptance of our limits）」の問題がある。

- 18) 前掲書『“境界領域”のフィールドワーク』終章の第2節「『3.11以降』の“境界領域”と“惑星社会”」において、古城利明は、これまでの私たちの調査研究が持つ「限界（our limits）」について、下記のように問いかけた：

……“境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を十分に練り上げていないからではないか、あるいは先送りしているからではないか。だが、すでに触れた「3.11以降」の状況を踏まえれば、この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない。さしあたりそれは、新原のいうように、「“生存の在り方”を問う」なかで、また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう。だがその「エピステモロジー／メソドロジー」とは何か。ここに残された課題があるように思う。「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」、それは宇宙論を前提とした身心論なのか、空無を覗き込んだ現象学なのか、課題は深い（442-443ページ）。

- 19) これは、ともに論文を書くなかで、“かたちを変えつつ動いていく（changing form）」ゼミ生諸氏の動きから示唆を受けたものである。“わがこと、わたしのことがら（cause, causa, meine Sache）」である“拘束／絆（servitudo humana/human bondage）」のマグマとどう出会い、どうかかわるか？「逃れられないものを持つ」とかすでに感じている人にとっては、「自分の外」（“異郷／異教／異境”の地）に出て相対化しとらえなおすべきもの。そうでない場合には、「自分の外」に出たあと、戻ってきて自分を掘っていき、選べるべきものである。“旅／フィールドワーク”によって、“固執観念（obsession/ossessione<obsessio）」、欠落感の欠落のなかでの“自執／自失（perdita antropologica）」、徹底した他者への無関心のもとでの「自我」の肥大化と欲望の極大化、「実体主義」的な「根」の理解から身体をずらし、“関係性の動態を感知する”。

自分の“固有の生の軌跡（roots and route of the inner planet）」のなかにすでに在る“拘束／絆（servitudo humana/human bondage）」の意味を、「社会」に適應するなかで考えなくなっていく。いまとなつては“景観（panorama）」のなかに埋め込まれてしまっている“多系／多茎の可能性”を再発見する／とりもどすプロセスが必要となる。他者との／ひととひとの間での“対話的なエラボレイ

ション”のなかで、ふりかえり／照らし合い、そこでの理解や言葉が療法的な意味を持って行くことが、関与型フィールドワークのゼミ活動の意味となっている。「調査研究」それ自体でなく、それを含み込み、下支えする「関係性の動態」の側にこそ「療法的な意味」がある。自分の内なる社会的病をとらえることで、“自らの社会的病とともにある社会の医者”として、照り返し／ふりかえりつづける，“リフレクシヴで療法的なブレイング・セルフ”となっていく。ゼミという相対的に守られた場所で、「自分を開く」練習をしていくことになる。

20) 第3回研究会(2014年11月29日,同志社大学)での「生存の場としての地域社会の探究／探求」報告後の新原と浅野慎一とのやりとりによる。

21) 前掲書『“境界領域”のフィールドワーク』第1章 海と陸の“境界領域” 日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」の第4節「“島々”の上にはいくつもの可能性の空が……」において、鶴見良行の「星くずから太陽を眺め、ナマコの眼を借りてヒト族の歴史と暮らしを考えてきた。もとよりナマコに眼はない。これは仮空に視線を合わせ事実を追った一片の物語である」(鶴見良行『ナマコの眼』筑摩書房,1993年,554ページ)に触発されつつ、メルレル・新原道信は、下記のように述べた:

私たちは、人間の知性が、抽象的な思考を生み出すことを知っている。しかし、それと同時に、私たちの身体は、この惑星地球という生身の存在に深く根をおろしている。こうして私たちは、記憶をたくわえ、その記憶を何度も何度も練り直していく。家族についての記憶、前の世代の記憶、どんな家に住んでいたのか、故郷はどんなところだったのか、どんな季候のどんな場所で育ってきたのか、少年時代、青年時代、青春をどのように過ごしてきたのか、誰と出会い、誰を愛し、誰を憎んだのか。どんな空の下で人生の意味を学んだのか、人生の方向を定める星座をどのように見つかったのか。どんな森、荒野、山の頂、雪、河や海で私たちは出会い、自分を、他者を識ったのか。私たちは、こうした追憶のフィルターとレンズによって、私たちのなかに深く根付いた生身の現実の意味を学び、問いを発する。“複合し重合する私 (io composito)”は、厳格に存在しているかのように見える「境界線」をあまり気にすることもなく、いまとなっては慣れ親しんだ境界の束をこえていく。そして、自らの旅の道行きで獲得した固有の見方に従いながら、いくつもの異境を越え (attraversare i confini),「厳格な境界線」の限界を抜け出ていく。たとえ「ノーマルではない」「違っている」「マイノリティだ」「不適応だ」と言われても、異境を旅する力とともに生きてゆく(同書,86-87ページ)。